知的女性のために

川和　孝

玉川選書136

より知的に，より伸びやかに——コマーシャル的日々から逃れ，より個性的に生きる女性への，書き下しエッセイ

人と研究シリーズ

知的女性のために　川和　孝著

町田　玉川大学出版部　1980

208p　19cm（玉川選書 136）

1. チテキジョセイノタメニ　al. カワワタカシ

sl. 婦人教育　Ⓝ 379.46

川和（かわわ）　孝（たかし）　KAWAWA Takashi

1932年2月生れ。イエール大学・大学院修了。劇団俳優座演出部を経て，劇団鷹の会結成。後，フリーで新劇，オペラ，ミュージカル，ファッションショーや各種イベントの企画・構成・演出で活躍中。日本演出者協会，日本音響デザイナー協会会員。玉川大学講師。

著書に『芸術心理学講座』『講座現代芸術』『撮影所』等がある。

現住所　182 東京都調布市つつじケ丘3—10—6

知的女性のために

1980年12月25日　第1刷発行©

著　者　川和（かわわ）　孝（たかし）

発行者　小原哲郎

発行所　玉川大学出版部

〒194　東京都町田市玉川学園

電話　0427-32-9111

振替　東京　8-26665番

印刷・製本　㈱ケイ・エム・エス

(分)1380(製)15067(出)4355

乱丁・落丁はお取替えいたします

知的女性のために

KAWAWA Takashi 1980, Printed in Japan

知的女性のために　目　次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

I 女
1 娘さん……8
2 妻になり……16
3 母になると……27
II 男
1 友情……38
2 闘い……45
III 顔
1 目には……54
2 顔のこと……59
3 ブスの条件……66
IV 言葉
1 読む……72

2 書く……76
3 話す……81
4 聞く……87

V コミュニケーション
1 パースン・トウ・パースン……94
2 人間の差別と学歴社会……99

VI 煙草について
1 煙草の害について……110
2 専売公社と消防庁……112

VII 旅
1 旅に出よう！……124
2 旅に出たら……129
3 帰れない旅……134

Ⅷ 常識について
1 兎小屋に住む常識……142
2 あきらめ……147
3 コマーシャル……151
Ⅸ 死ぬこと
1 母と父の死、そして……162
2 自殺について……171
Ⅹ 生きること
1 教養とは……180
2 幸福とは……187
3 生きること……192
注……197
私のすいせん図書……202
あとがき……205

I

女

1　娘さん

女はいつ頃から、自分を女だと意識するのだろうか？

いや、両親や兄弟の存在によって意識させられてしまうといった方が良いのかも知れない。それも、一姫二太郎ではないが男の兄弟があると、二、三歳の時分から、「女の子なんだから……」「女の子のくせに……」と男の子との差を意識させられるようになる。女ばかりの姉妹であったら、それほどでもないだろうに。つまり、幼い時から女は男と対称的に育てられる傾向が強く、両親は娘の将来について、あまり遅くなくつまり世間並（適齢期？）に、まともな若者と結婚出来て、幸せな生活に入れるようにと念じている訳で、なにも娘に、司法試験に合格して欲しいとか、外交官になってくれなどと願わないものである。

両親から、男ほど期待されないで、ごく当り前の結婚をして、幸福な生活をと望まれるのが女の子なのであり、義務教育期間中、ひどく成績が悪くない限り、両親は心配しないし、何としてでも四年制の大学へ進学させなければと教育パパ・ママになることもない。

それが男の子だったら、早くは幼稚園から、通常でも小学校三、四年ぐらいで先のことを考え

て、両親はあれやこれやと奔走する訳である。すなわち、早くから家庭教師をつけたり、塾へ通わせたり、進学予備校のテストを受けさせたり、それは大変なものである。

日本で子を持つ、特に男の子を持つ両親の全部が全部ではないにしても、このような傾向は否定出来ないのではなかろうか。

赤ん坊が生れた時、「男の子さんですか、そりゃ良かったですネ」と男児を歓迎するのは御承知の通りで、生れたときから男の子は女の子よりも周囲から期待（?）されているのが通例であって、それからというもの男子はその重圧の日々を過すことになり、「男はつらいよ」という結果になるのだ。

それに比べて、女の子は進学問題の中心にまき込まれるケースは男生徒に比べたら、ずっと少なくて楽であるが、そのため（?）か、小学校、中学校においてはのびのびとして男生徒をリードする。成績もクラスでの上位は女性が多いのが普通で、ホーム・ルームなどの発言も女生徒の方が活発である。

それが中学、高校へ進むと変化して来る。最近は昔ほど著しい変化ではないが、男はやる気（?）を起してガリ勉をする。もちろん女性も男に負けずに一流校へ入学しているが、男性ほどではない。女子の東大入学者はさほどめずらしくなくなったし、もとより学力の男女差はないはずである。ただ、男ほど周囲から尻をたたかれないだけのことである。変化とは男子の場合、周

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

囲の期待が女子よりだんだん大きくなり具体化して来て嫌でも進学か否かを決定づけられてしまうことだ。

両親はもとより、社会全体が女性にあまり偉くなってほしくないと思うふしがあるのか、せいぜい短期大学ぐらい出て、早いとこ良い相手を見つけて結婚させてしまおうというのが社会通念であって、当然の如く良い妻にさせるのが最終目標のように見受けられる。したがって、就職に関しても両親も、本人もそれほど躍起になったりはしないし、良妻賢母型教育は広く根強く継承されているといえよう。

当事者であるはずの女の子は早くから、この日本的美風（？）をのみ込んでしまうのか、大きな社会問題ともならずに平和解決（？）している。学歴社会、男女賃金格差、結婚即退職、定年制といった問題がいつも低い次元で繰り返されるだけで、女性自身が自分の問題としてとらえないことから、一歩も前進しないのが現状である。

女が自分を女だと意識させられるのは、母親を通じてであろう。それは妻であり、母であり、家庭の主婦としての自分の母親を観察することから、女である自分の将来の進路図が暗示されることであり、しかも、漠然とであるものの、女の終着駅（？）を身近に見てしまい、その結果、女の幸せは、美しくなること、男に愛されること、人並の結婚式を挙げること、男から捨てられないようにすること、といった定食コースのような路線が提示されるし、それに逆らわないよう

に歩むだけである。

小学校において、ホーム・ルームで常に道徳的発言は女の子である。男の子が独走したり、変ったことをやろうとすると、ブレーキをかけるのが女の子である。保守的ともいえるし、既成の社会的ルールを守ろうとする女の子は安全弁であり、いつまでも体質の変化はみられない。また男の子の脱線ぶりを教師に言いつけるのも女の子で、もしそんな密告を男の子がしたら、女の子みたいだと言われて以後クラスの男生徒から仲間にされなくなるのが落ちである。密告するのは男らしくないとされているからそんな男が出現するとクラスの男生徒たちはがっかりするものである。

でも、女の子は母親が持っている保守主義、道徳規範を踏襲しようとするようで、「前例がありません」という役所のように、融通がきかぬものである。交通違反を取締る婦人警官はその最たるものであって、あの仕事を女性にやらせるのは、女性の特質をすこぶる心得た上司である男性が存在してるからだ。幼少の頃より女性は融通がきかないという実績が駐車違反を事務的に処理させているのだろう。

女の子が女を意識する一面として、生理を体験することである。年々早くなって、小学校においてその多くが初潮をみるといわれている。そうすると、何故か男を意識し、男の子に対して、おせっかいになってくる。

好きな男生徒に対して、何か作ってきてプレゼントする、誕生祝いのパーティを企画するなどの行動に発展する。バレンタイン・デイにチョコレートを贈るなどというのは良い方で、自分勝手に手袋を編んで突然贈ったりして男の子を惑わすものである。西洋にはセント・バレンタイン・デイが存在し、日本の女の子には一年中がバレンタイン・デイとなる、そして、男生徒の家にどんどん電話をする、手紙を出すという積極的行動をするので晩生(おくて)の男の子はたじたじとなる次第。

男生徒は小学生のうちから、「結婚しちゃうわョ」と女生徒にせまられて逃げまわっている。これは、単に微笑ましい子供達の情景と笑ってはいられない。日本の女の子にとって、良い相手を見つけて積極的にアタックするという、あつかましさが内在する証明で、押しかけ女房の雛型としか思えないし、女にとって結婚が最終目標だなと想わせる初期的現象である。

どうして、女の子の頭の中には、男、おとこ、オトコしかないのだろうか？　女性の週刊（習慣）誌や月刊（欠陥）誌のキャッチ・フレーズは常に、セックス、結婚が中心でいかに男性に愛（？）されるかばっかりではないか。まさに男性の皮膚感覚によって女性誌が作られ、いかに男性好みの女性づくりが問題となっているかが解る。なかには、〝東大に入学できる子供を生む方法〟なんて馬鹿げたものもある。そのためなら、優秀（？）な精子を買って来てでもといわんばかりで、あきれてものがいえなくなってしまう。つまり、子を生むための女、一流校（？）へ入

れる子供を産むための女の育成に重点が置かれ、政治、経済、社会のことは男まかせ、ひとえに家族のため、家庭のためにつくす女性像を追求してるのだ。

そんな女性ばかりではないといつも信じているし、私の文章を読んでいる人も、まさかそんな人ばかりではと思っていることだろうが、何十万部と売れている雑誌の総てといって良いほどほとんどが「男性に嫌われる女性のチェック・ポイント」「幸せをつかむ女性の秘訣」こんな企画や記事を繰り返し載せているということは、読んでいる女性、そして、「そうネ」と納得している女が日本国中に何百万人と存在していることを意味している。

その反面、芸能人の浮気、離婚の記事は必ず掲載されるので、男性好みの女性像を読ませると同時に、妻を捨て他の女性に走る俳優などを女性の敵（?）の如く扱うのであるから何とも曰く言い難しである。読むということは即肯定してしまうことではないにしても、習慣誌であるからコマーシャル同様、次第に同化されてしまうのは事実だろうし、第一そんな記事に反発を覚えるならば、そのような女性誌は購読しないはずである。

もういいかげんに、女にとって結婚が総てではないし、男に愛されることばかり考えないで欲しいものだと思うのだが、消滅の気配はない。それは男にとっては有難い現象というべきなのだろうか。女性誌を扱っている男性編集者のにやッとした笑顔が見えるようではないか……。

別の傾向として男性らしくない男が多くなっている昨今、女性はもっと広く深く、人間の世界

をみつめてもらいたい。素晴しい人生とは結婚だけでなく、自分自身でこの道こそと思う世界に入って行き、苦しみそして楽しむことではないか。

読書の勧めと受取られてもよいが、立派な仕事をした歴史上の政治家、物理学者、芸術家、スポーツマンなどの人生論や自伝から学ぶこと、今迄の優れた文学や多くの遺産に触れ男女を問わず人間の個性ある業績を見直すこと、さらに自分の将来、一生続けて行くような仕事つまりライフ・ワークや趣味を見つけることである。

自分が娘であるうちに男好みの女性になる勉強をするより、より充実した人生を送るべく、方向、目標を定めるべきであろう。もちろん、それが結婚や育児によって支障をきたしてそれが中断したり、挫折してしまうかも知れないにしても、それこそ吾が人生と言うべきだろう。

最初から結婚ばかり夢みないことである。結婚は人生の墓場であるというではないか、また、結婚は忍耐であるというではないか、家庭生活をあまり理想化するのは危険だし、バラ色の人生を期待し過ぎないことである。身近に、結婚の先輩（母親）がいるではないか。だから、男性は「結婚しようと思う女性の母親を見よ」と言う。二十数年後にはああなるのだ、それでも良いのか？　という使用前、使用後の見本であり警鐘である。考え方、行為、料理、容姿など親の欠点の方を多く受け継ぐからだ。「愛する人のために」などと、いそいそと食事や身のまわりのことをしているのは、結婚して二、三年までで、三食昼寝つきなどといわれたり、立話し好きの魅力

ないおしゃべり女にかんたんに変って行くのを見聞しているではないか。

まさか、貴女もそんな女を目標にしている訳じゃないでしょう。主婦といいながら家事の専門家にもならず、料理、整頓、掃除まるでダメというサンプルはいくらも見ることができる。そんなダメ女房になるため、子育てのため、次の世代のためにのみ結婚しなくても良いではないか。

「女の幸せは男次第で決まる」と貴女も信じている一人ですか？　貴女が人間としての生きる努力もしないし、将来への目標も持たずに……。

押しかけ女房のように男にちょっかいを出さなくても、黙っていても貴女自身が素晴しければ、男なんて嫌というほど寄ってくるものですよ。それになにもくだらない男を相手にするくらいなら立派な女友達と人生を語り、仕事を論じ、旅の計画を練り、音楽、演劇、映画、美術などに接することである。浅薄に女であることを意識してばかりいないで人間であることを考えたい。

それこそ、貴女にとって二十代は一度しかないのだから、アイ・シャドウやマスカラに頼らず大きく目を見開いて、自分自身の人生計画をうち樹てる時である。日本の女性は、趣味、目標、方法、実行などに関して自律、決断することがない。すぐに隣の人や友人に同意や助けを求めたりするものだ。

「少年よ大志をいだけ」という、クラーク博士の言葉ではないが「娘さんよく聞けよ、結婚は二の次で、先ず、人生の目標を持て」といいたい。〝ラブ・ミー・テンダー〟などと男に甘えず

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.